

1. 無縁化する墓と墓じまいへの対応

山田 慎也（国立歴史民俗博物館）

1. 研究目的

近年、急速な少子高齢化の進行や家族構造の変容により、従来維持されてきた死後の祭祀が問題となっている。家を基盤とした祖先祭祀においては、追悼空間として家の仏壇と墓があるが、中でも中心的な存在が墓であった。この墓の維持が現在では困難になっており、承継の必要のない葬法が1990（平成2）年以降、開発されるようになってきた。例えば、合葬式共同墓、散骨、樹木葬などがみられるが、まずは墓の祭祀の状況がどのような事態を生じているか、特に過疎化する地域における寺院と墓の現代的動向を把握するのが、本研究の分担課題である。『寺院消滅』（鶴飼秀徳、2015年、日経BP社）等にも見られるように、地方における寺檀制度の崩壊は急速に生じている。

地方においては、高度経済成長期以降、産業の転換による人口流出が生じ、過疎化が進展している。近年の少子高齢化の進行により人口減少はさらに加速している状況である。それでも従来は、かつての死者儀礼を変質しながらも何とか維持してきたのであったが、現在では、いよいよ新たな対応に迫られている。

しかし、個々の寺院や墓の対応は、置かれた状況や関係者のあり方で異なっており、文化的な動態を把握し現代人の死生観を考える上で、実態を示すモノグラフの作成は重要な課題である。そこで本調査は、和歌山県南端部の紀南地域を素材として、地方の過疎地域の事例を取り上げ、死者祭祀の実態をまず捉えることを目的としている。

2. 地域の概要

和歌山県串本町、古座川町は、紀伊半島南端部に位置する。2005（平成17）年4月に串本町と古座町が合併し、現行の串本町が誕生した。串本町は2010（平成12）年10月には、1万8249人であったが、2015（平成27）年10月には、1万6559人と、わずか5年で2000人弱の人口減となっている。また古座川町は、平成の大合併では特に合併することなく、2010（平成12）年10月には3103人であったが、2015（平成27）年10月には2825人と300人弱の人口減であり、それぞれ人口の流出は深刻である。

これらの地域は、和歌山県の南端部であり、串本駅は、阪神圏からも中京圏からも沿岸部を走る紀勢本線によって特急で約3時間半かかり、また古座川流域に位置する古座川町の集落は古座川河口から川沿いを自動車に進むこととなり、さらに時間がかかる。

ただし、阪和自動車道が一部一般国道自動車専用道路区間を含むものの、南紀田辺ICまで開通し、さらにその先は紀勢自動車道が、すさみ南ICまで伸びており、串本市街まで15キロほどとなっている。ただ、こうした道路の開通がむしろ人口流出を加速する場合もあ

り、人口流出の事態は予断を許さない。

沿岸の串本、古座のおもな生業は、漁業とその水産加工などの関連産業である。串本は現在も遠洋漁業の基地にもなっているが、近世期には古座に紀州藩の鯨方がおかれ、漁村としてはむしろ古座の方が賑わっていた。しかし双方とも水産業の衰退は免がれていない。

古座川流域に点在する山間部の集落では、主要な産業の林業とわずかな平地の農業であるが、わずかな耕地しかない農業はもともと主産業とはなりにくい状況であり、また林業も戦後には輸入木材による価格の下落によって衰退している。近年、古座川町の平井地区など一部地域では、柚子などの商品作物による地域の活性化を計っているところもあるが、多くの地域はこうした材料を見つけられておらず、おもな地域産業がない状況である。

3. 山間部寺院の場合

古座川町および串本町には、集落ごとに寺院があり、おもに集落の住民が檀家となっている。例外は古座地区であり、戦前まで漁村として栄えており、1集落に曹洞宗青原寺、浄土宗阿弥陀寺、浄土真宗本願寺派善照寺の3ヶ寺がある。中には100軒以上の檀家数の寺院もあるが、多くの寺院の檀家は数十軒程度のため、無住となり兼務住職の寺院となっている。こうした中で、最も過疎化の進む古座川上流域の寺院について報告をしたい。

(1) 古座川町小川の臨濟宗宝音寺

古座川は紀伊半島の大塔山を源流としている本流と、小川という支流に分かれており、小川上流にある小川集落の菩提寺が宝音寺である。宝音寺住職の伊藤氏は、父の代から宝音寺の住職であり、ご自身もこの地で育った。その後、東京に出て仕事を持ち、13年前に小川地区に戻って住職を継いだ。宝音寺の檀家は、小川集落だけでその数は約30軒であり、伊藤氏は小川流域の他の集落の寺院を5ヶ寺兼務している（山手の延命寺、宇洞井の延命寺、田川の瀧川寺、赤木の東光寺、小森川の清雲寺）。宝音寺を含め6ヶ寺すべてを合わせても、檀家数は約60軒ほどであり、小川の最上流の集落である小森川の清雲寺の場合には、檀家は4軒しかないという。

さらに6年前には、七川地区といわれる、古座川本流上流部の地域の寺院5ヶ寺も兼務することとなる。それは佐田の大宝寺、添井川の善光寺、平井の広徳寺、西川の宝光寺、松根の永泉寺であり、檀家数は約100軒である。もとは平井の広徳寺住職がこの七川地区の寺院を兼務していたが、広徳寺住職が亡くなりその後継者がいないため、伊藤住職が兼務することとなった。

(2) 葬儀の状況

伊藤氏が住職となった13年前から、葬儀は自宅での引導、告別式であり、寺で引導を行うことはなかった。七川地区で5ヶ寺の内2ヶ寺で自宅出棺、寺での引導、告別式を行っているという。その中で、近年「家族葬」という言葉が浸透し近隣の人びとの参列を辞退

するようになる。だが自宅での葬儀の場合には、実際には参列を断ることが難しく、単なる小規模な葬儀となってしまうという。一方、古座地区や串本地区にある葬儀業者の斎場を使用する場合には、近所の人びとの参列もない。

家族葬の浸透によって儀礼のあり方も変化している。家族葬では、地域で重視されていた通夜のご詠歌が行われなくなった。これは近隣の老女によって行われていたが、ご詠歌が通夜の儀礼としてよりも参列として認識されたため、それを排除することになったのである。また、香典の辞退は家族葬の有無に拘わらず一般的になったという。これは、葬儀後の香典返しが無くなり、手間が省けるからと一般には理解されている。

直葬については、まれにIターンなどでやってきて住み着いた人が亡くなり、引き取り手がない場合に、町が無縁の死者として火葬をする場合もある。小川地区の住人で近親者がなく、老人福祉施設で亡くなった老人が亡くなったときには、施設の依頼によって読経を行ったという。小川流域6ヶ寺の兼務寺院の檀家は、基本的には死亡の連絡がないまま、葬儀が行われることはない。

しかし、6年前から兼務となった七川地区の檀家の場合、遠方で他の僧侶に依頼し葬儀を行い、納骨したいと連絡が来る場合がある。伊藤氏は、納骨の際の読経はやむを得ず行うが、他の僧侶による引導で葬儀を行った場合には、引導を行った僧侶の寺院の檀家になったと考えている。よって、それ以降の法要はその寺院に頼むべきであり、こちらは受けないという。

また事前に連絡がなく、火葬を済ませて納骨を希望する人もいるが、この場合特に頼まれなくともこちらで引導作法をしてから納骨をする。こうした例の場合には、喪主となる人は、結婚して姓が変わった女性であることが多い。男性の場合には後継者として葬儀を行うという意識がみられるが、女性の場合には葬儀を自分が行わなければならないという意識があまりないのか、もしくは夫に対する遠慮もあるようで、火葬のみで済ませる傾向が見られるという。

(3) 離檀

離檀は、全体で年間2軒から4軒程度あるという。最後に残った高齢者をその子どもが引き取る場合に、墓も移転することで離檀をする場合も多いが、上述のように他で葬儀してきたことで、結果的に離檀している場合もある。また最後に残った高齢者に子どもがいなかったり、いたとしても関係が途絶していたりする場合には、葬儀だけは地元親族が行って墓に納め、後は自然消滅する場合もある。特に最近兼務となった七川地区の方が、臨終時には連絡もなく突然納骨を希望する場合などもあり、檀家の動向がつかみにくいという。従来から兼務している小川地区の檀家は、ある程度それぞれの檀家の事情も把握しており、また関係なども維持されているので、無断で葬儀が行われるなどの事態はまだ生じていない。

4. 考察

以上のように地方の村落においても、「家族葬」という用語が浸透し葬儀の小規模化が進んでいる。ただし用語が先行し、家族葬の定義もなく、その意味の広がりも十分に理解されていないため、混乱している状況である。しかもそれに対する近隣の人びとの戸惑いもあり、また重要な通夜儀礼であった西国三十三番のご詠歌が、家族葬の名のもとに行われなくなり、香典の辞退もあるなど、急速に葬儀を支えるネットワークの断絶が生じていることがわかる。

さらに、死者の祭祀の消滅は、墓の移転など明確に行われる場合と、葬儀のみは何とか親族で行いつつ自然消滅する場合、さらには他の地域での依頼僧侶による葬儀によって関係が切れていくなど、緩やかに寺壇関係が切断されていくことがうかがえる。

これには、この地域における墓地の位置も大きく関係していると思われ、裏山などの屋敷墓地や集落ごとなど、墓地が点在しており、住職のいる寺院境内墓地とはそのつながりの意識は全く異なっている。さらに古くからの兼務寺院は、それほど激しい離檀が生じていないのは、寺院や住職との日常の紐帯の違いであり、新たな兼務寺院で火葬のみの納骨や依頼僧侶による葬儀などが生じているのも、こうした背景があるからであろう。

宝音寺の場合も、その檀家数の少なさから後継者の危惧があり、現住職も自身の年金があるので生活が可能であるが、それがなければこの地での生活は厳しいことを述べており、やがて宝音寺も無住化の可能性も否定できない。一方で、墓じまいに対する積極的な展開はこの寺院では見られない。合葬式共同墓については、経済的負担から困難であるという。これも地域、寺院ごとの対応の違いである、ミクロな分析とマクロな分析を重ねていく必要がある。